

木都に誕生した新たな街のシンボル「マルヒコビルディング」

【秋田県能代市】
能代駅前商店会

小さなチャレンジの積み重ねが人と街を少しずつ変えていく

能代市は、秋田県の北部に位置し、日本海に面したまち。現在、人口が5万人を切っているが、古くから天然秋田杉の産地として知られ、市内の製作所にて加工された材木を海外にまで輸出していたことから、東洋一の木の都として「木都能代」と呼ばれている。そのほかにも、能代港での洋上風力発電事業も盛んであることから「エネルギーのまち」、漫画「SLUM DUNK」の山王高校のモデルと言われている能代工業高校（現：科学技術高校）などでも知られている。

能代駅前には、駅前商店会を含む4つの商店街組織が存在しており、昭和60年代には約4,400店舗もの商店が立ち並び、大きく賑わっていた。しかし、若者の市外流出をはじめ、人口減少に歯止めがかからず、駅前周辺にもシャッターの降りた建物が増えていった。

秋田県が主催する地域まちづくり勉強会への参加をきっかけに、空き店舗を活用して街のために活動を続けられている「合同会社のしろ家守舎」代表社員の湊 哲一さん、行政の立場から活動に伴走していた能代市役所環境産業部 商工労働課 課長補佐の堀口 誠さんに、これまでの活動についてお話を伺った。



（提供：合同会社のしろ家守舎）

かつてはシャッター街の代名詞だった

能代市には、能代駅前に4つの商店街が存在しており、以前はアーケード内に商店が軒を連ね、毎日買い物をする人で溢れていたため、「東洋一のアーケード通り」と評されていた。しかし、若者の市外流出をはじめ人口減少に歯止めがかからず、いつも買い物客で賑わっていた駅前商店会通りも、いつしか空き店舗が増加し、「東洋一のシャッター通り」と呼ばれるようになってしまった。



かつての商店街通り

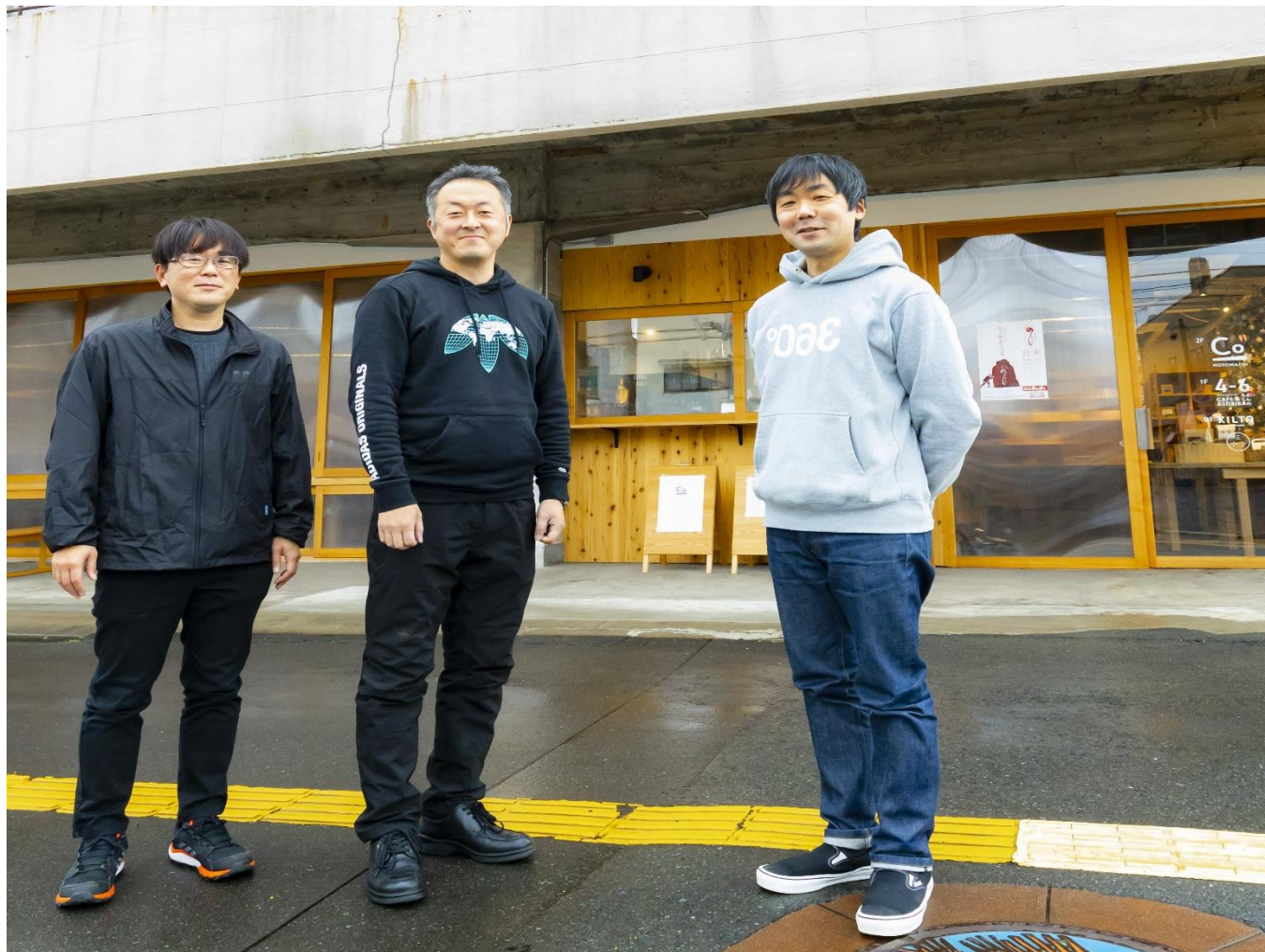
(提供：能代市商工労働課)



(提供：合同会社のしろ家守舎)

各商店街組織は、人口減少によるシャッター街化に危機感を持ち、様々なイベントを実施したがにぎわいは戻らず、もう以前のように戻らないと後ろ向きに考える人も少なくなかった。

現状を改善すべく、能代市が「能代市中心市街地活性化計画」を策定し、様々な取組を進めたが、なかなか効果が上がらず悩んでいたところに、秋田県主催の「動き出す、商店街プロジェクト」へ参加してみないかとの相談が、県の担当者から能代市役所商工労働課に勤めていた堀口さんのもとへ届いた。



堀口 誠さん（左）、阿部 誠さん（中央）、湊 哲一さん（右）

（出典：「EGAO 2023 Spring（春号）」）

このプロジェクトへの参加を決めたことにより、街について考えるきっかけとなり、現在の取組へとつながっていくこととなる。

「動き出す、商店街プロジェクト」をきっかけに出会う

動き出す、商店街プロジェクト
「動き出す、商店街プロジェクト」は、空き店舗の活用を通じた商店街再生を学び、体験する場です。昨年とは異なり、能代市と美保町、大館市で開催され、現在は事業として実を結び店舗が活用されています。2年目の今回は、能代市と大館市、美保町、大館市で同時並行で開催を行います。商店街の空き店舗を対象にしたリノベーションの事業計画を半年間、実際に進めながら進めながら進めていくという内容です。11月と来春3月に公開プレゼンテーション（発表発表）を行います。本プロジェクトは、空き店舗の再生だけでなく、周辺エリアの活性化、まちの再生を目指します。新しいまちの暮らし（まちづくり）を実現するための事業計画を共有してまいります。

8/25 土 18:30-19:30	9/6 火 18:30-20:00	9/17 土 18:30-20:00	10/9 水 18:30-20:00
------------------------------	-----------------------------	------------------------------	------------------------------

会場／能代市市民プラザ（〒991-0031 秋田県能代市市民3-11）
当日お車でご来場の方は、臨時駐車場として北高跡地をご利用ください。
参加申込み必要 定員80名
参加費は無料です。お申し込みは下記までお願いします。

www.ugokidasu.com

動き出す、商店街プロジェクト
「動き出す、商店街プロジェクト」は、空き店舗の活用を通じた商店街再生を学び、体験する場です。昨年とは異なり、能代市と美保町、大館市で開催され、現在は事業として実を結び店舗が活用されています。2年目の今回は、能代市と大館市、美保町、大館市で同時並行で開催を行います。商店街の空き店舗を対象にしたリノベーションの事業計画を半年間、実際に進めながら進めていくという内容です。11月と来春3月に公開プレゼンテーション（発表発表）を行います。本プロジェクトは、空き店舗の再生だけでなく、周辺エリアの活性化、まちの再生を目指します。新しいまちの暮らし（まちづくり）を実現するための事業計画を共有してまいります。

第1回 公開プレゼンテーション
11/20 WED
[開場] 18:30 - [開演] 19:00 -

会場
ヤマキウ南倉庫1F
KAMENOCHOHALL KO-EN
秋田市南通島の町4-15
（秋田県秋田市南通島の町4-15）

予約席あり（当日席あり）
当日お車でご来場の方は、臨時駐車場として北高跡地をご利用ください。
ご予約は下記までお願いします。お申し込みは下記までお願いします。

プログラム
①基調講演 小友 康広氏
②プレゼンテーション
③質疑 小友 康広氏・加藤 真之氏

当日の模様はホームページ内で動画配信させていただきます。

www.ugokidasu.com

動き出す、商店街プロジェクト
「動き出す、商店街プロジェクト」は、空き店舗の活用を通じた商店街再生を学び、体験する場です。昨年とは異なり、能代市と美保町、大館市で開催され、現在は事業として実を結び店舗が活用されています。2年目の今回は、能代市と大館市、美保町、大館市で同時並行で開催を行います。商店街の空き店舗を対象にしたリノベーションの事業計画を半年間、実際に進めながら進めていくという内容です。11月と来春3月に公開プレゼンテーション（発表発表）を行います。本プロジェクトは、空き店舗の再生だけでなく、周辺エリアの活性化、まちの再生を目指します。新しいまちの暮らし（まちづくり）を実現するための事業計画を共有してまいります。

1/23 木 18:30-19:30	2/4 火 18:30-20:00	2/26 水 18:30-20:00
------------------------------	-----------------------------	------------------------------

会場／能代市市民プラザ（〒991-0031 秋田県能代市市民3-11）
当日お車でご来場の方は、臨時駐車場として北高跡地をご利用ください。
参加申込み必要 定員80名
参加費は無料です。お申し込みは下記までお願いします。

www.ugokidasu.com

秋田県の商店街活性化に向けて講演会や公開プレゼンテーションを実施

（提供：合同会社のしろ家守舎）

秋田県が主催する「動き出す、商店街プロジェクト」は、国内で先駆的な取組を行っていた方を講師として迎え、勉強会を通じて商店街の空き店舗問題に向き合う取組。勉強会後には、参加者で地域の課題について話し合うワークショップや、事業計画の策定支援や公開プレゼンテーション等も実施された。

堀口さんは当初、軽い気持ちでこのプロジェクトに参加したという。参加するには民間事業者の中からプレイヤーを募る必要があったため、当時能代市内で「ミナトファニチャー」という会社で家具作りをされていた湊さんをはじめ、地域の事業者にも声をかけて一緒に参加した。

事業計画策定の際には、当初はそこまでの熱量をもって臨んでいなかったため、講師の方から「地域のニーズをもっと把握するべき」など、踏み込んだ指摘を受けて戸惑う面もあったが、講師によるブラッシュアップが、街の中に何が足りないのか本気で向き合い検討するきっかけになり、「子どもの姿が街中に少ない」「子育てしているママさんの居場所が少ない」「クリエイティブな仕事が見えてこない」「木都らしい場所がない」という能代市における地域の課題があげられた。また、湊さんをはじめ参加者皆で街の課題や打開案の検討を重ねた結果、自ずと関係者全員が主体となって「やろう！」と前を向いて考えはじめるようになっていった。

しかし、事業を実施するための場所を確保しておらず、このままでは考えた計画が実行できないと考えていた矢先に、空き店舗となっていた旧丸彦商店と運命的な出会いを果たす。

理想的な空き店舗との出会い



旧丸彦商店の空き店舗

(提供：合同会社のしろ家守舎)

「動き出す、商店街プロジェクト」に参加し、事業計画を策定したものの、事業実施場所について決めあぐねている状態であった中、能代駅前的大通りにも面している空き店舗となっていた旧丸彦商店と出会った。この物件との出会いで、これまでの計画が一気に現実味を帯び、本格的に動き出すことになる。

当時、能代市にはコワーキングスペースがない、木の都と呼ばれているにも関わらず一つの建物で木工体験・食事を行える施設が無いことから、これらを一つの建物で実施できるような物件を探していた。しかし、木工体験を行えば機械音が近隣住民の迷惑となりかねず、すべての条件を満たす物件探しに難航していた。そのような中、「旧丸彦商店」は地下1階から2階まであり、地下で作業を行えば騒音問題も解決するなど、最適な条件がすべて揃っていたという。

湊さん、堀口さんは、建物所有者の方へ地域の活性化のために建物を貸していただけないか依頼へ向かったが、当初は理解を得られなかった。旧丸彦商店は、元々のご兄妹で営まれていた地域の酒屋で、事情により店を閉めてからは内装や家具等がそのままになっていたこともあり、所有者の方は、よそに貸したり見せたりできる状況にないと考えていた。

しかし、計画していた事業を実施する場所は、もはや旧丸彦商店しか考えられなかった。この建物で事業を実施することが地域の活性化にどれほど大きな影響を与えるか、湊さんをはじめとした商店街事業者や、堀口さんなどの市職員も所有者の元へ足しげく通い説得を試みた。所有者の方の家の、育ちすぎて切った庭の木を運ぶのを手伝うなど、できることはとにかく何でもやった。徐々に地域でも応援してくれる人が増え、地元新聞社がこの事業計画を知り、積極的に後押ししてくれた。その甲斐もあり、最終的にはこの事業に賛同いただき、物件を貸していただくことに同意を得たという。

事業を実施するにあたり、湊さんをはじめ、「エモーショナルダイニング株式会社」代表取締役の田中 秀範さん、「株式会社鈴喜代」代表取締役の鈴木 隆宏さん、「お仏壇の千栄堂」店主の阿部 誠さんの4名で、「合同会社のしろ家守舎」を設立。



湊さん（左端）、田中さん（中央左）、阿部さん（中央右）、鈴木さん（右端）

（提供：合同会社のしろ家守舎）

設立後、地域課題解決のための機能を加え、地域の多様なニーズに対応できる複合施設の整備に向けたリノベーションに着手する。

新たな地域拠点「マルヒコビルディング」の完成



旧丸彦商店改め「マルヒコビルディング」

(撮影：中小企業庁商業課)

複合施設の整備にあたっては、中小企業庁にて実施していた「地域商業機能複合化推進事業」も活用しつつ、旧丸彦商店が新たな地域拠点「マルヒコビルディング」に生まれ変わる。

能代地域の抱える課題を基に備える機能を考えたとき、コワーキングスペースがなかったため、建物の2階に複数の事業者が入れるようなコワーキングスペースを導入した（国の補助金活用前に導入済）。木都と呼ばれているがそれらしい場所がない点についても、地下にシェア工房を設け、自分で空き店舗を改装する技術を学ぶためのプログラムを実施するための空間を整備した。また、パソコン1台で家具や内装をデザインでき、それをプリンターから出力することで木材を自動で加工してくれる加工機械「ShopBot」も導入し、ワークショップも実施できるようにした。地下の工房は、「KILTA 能代」として DIY の学ぶ学校として本格的に稼働させようとしている。

湊さんは、「地域住民の中にも、小さくてもいいから何か事業を始めたい、と考えている方は多くいる。しかし、新規出店のためには最初の一步を踏み出すことが難しい。のしろ家守舎として、そうした小さな仕事の後押しをしていきたい。」と熱く語り、そうした小さなチャレンジ（新規創業）を後押しする取組として、マルヒコビルディングにて「ちいさなシゴトのつくりかた」を実施した。

地域で仕事を新たに創出したい方を対象として、年間を通して勉強会やワークショップを実施。また、講座の3回目と5回目には、実際に事業にチャレンジし、小さく挑戦する機会も設け、具体的な開業に向けての課題の洗い出しを行い、全6回の講座を通して「自分らしく働く」ことを後押しした。

この講座はオンライン開催にも対応しており、当初は対面とオンライン合わせて20名程度集まればと想定していたが、実際には77名もの参加者が集まったという。地域の中で、新たに何かを始めたいと真剣に考えている人が多く、この講座を受講した77名の内、9名の方は駅前商店会主催イベント「のしろいち」でチャレンジ出店した。



マルヒコビルディング地下1階

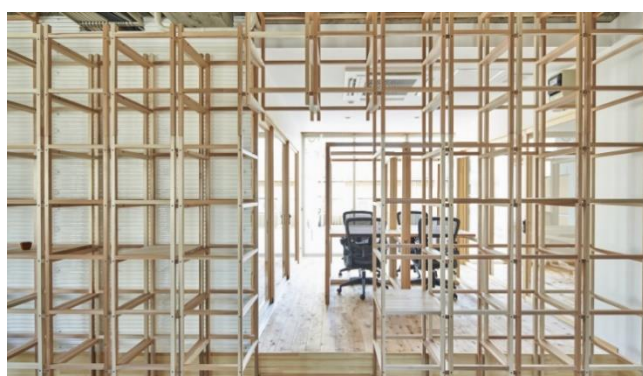


加工機械「ShopBot」

(撮影：中小企業庁商業課)



マルヒコビルディング2階の内装



(提供：合同会社のしろ家守舎)



マルヒコビルディング1階の内装



(撮影：中小企業庁商業課)

新たに整備した「マルヒコビルディング」以外にも、駅前の公道（歩道＋車道）の道幅がとても広い特徴を活用し、車道を歩行者天国としてイベント「のしろいち」を、ハロウィンをテーマに実施した。秋田県内でハロウィンイベント自体が少ないこともあり、全県から人が集まり、最終的には1万5千人の人が集まる一大イベントになったという。

駅前の公道は県が管理しているため、イベントを実施するには秋田県警及び秋田県の許可が必要となる。当初は、車道を歩行者天国にするといった申請では承認が得られなかったが、まずは歩道に椅子を置いて休む場所を作るといった小さいイベントを3、4回実施し、その後、東京都の池袋で実施されていた公共空間の利活用の事例を参考に、歩道に人工芝を敷いてその上で自由に遊ぶ空間を作り上げるといった取組に拡大する等、申請内容を徐々に大きくしていった結果、最終的には駅前の公道でイベントを行う意義について理解をいただき、今では県警の方から提案されるなど、協働でイベントを実施する関係になっている。



道幅の広い歩道を活用し、人工芝の上で遊ぶ空間を創出

(提供：合同会社のしろ家守舎)



公道を活用したイベントに県内から多くの来街者が集まる

(提供：合同会社のしろ家守舎)

イベントを実施したことによる反響はとても大きなものだったと湊さん、堀口さんは語る。これまで地域に数多く存在していた空き店舗の所有者たちは、貸し出しについてどこか後ろ向きであった。しかし、イベントが大盛況に終わり、商店街が賑わっている様子を見て、イベントの時だけ貸し出しても良いという所有者が現れた。中には、イベントに関係なく空き店舗の貸出しの承諾があり、新たな出店もあった。



少しずつ街の空き店舗が埋まり始めている

((左) 提供：合同会社のしろ家守舎 (右) 撮影：中小企業庁商業課)

子どもや子育て世代が街に安心して居られるように

「能代市には、大学が無い。子どもたちは高校を卒業すれば、市外の大学へと進学し能代市を離れることも少なくない。そうして出ていった住民が戻ってくるためには、能代市での思い出を作り地元愛へとつなげていく必要があるが、現在、能代市ではそういった思い出を作れるような場所が少ないように感じている。」と湊さんは語る。

子どもの居場所が少ないと共に、子育て世代の人々が安心して過ごせるような場所も不足しており、これらの課題を解消するべく「マルヒコビルディング」の1階にカフェ＆子どもの遊び場「4-6（よんのろく）」を整備した。空間の半分をカフェと物販スペース、もう半分を、木都らしく木材をふんだんに使った子どもの遊び場として整備したことで、休日には子育て世代の夫婦やママ友達が立ち寄り、子どもたちは遊び、大人は一息つける憩いの空間となっているという。特に、カフェスペースには、カフェがオープンして1年以上経つが、若者から高齢者まで幅広い客層が訪れ、賑わっているとのこと。

また、1階を整備するにあたって、地下の工房に導入した「ShopBot」を活用して、地域住民や地域の子供たちと一緒に、木材の加工や壁紙の塗装などを実施することで、「マルヒコビルディング」への愛着も増し、子どもたちにとっても思い出となり得る空間の一つになった。



制作風景

(提供：合同会社のしろ家守舎)

更に、湊さんが家具を製作するために借り上げていた古民家を活用し、宿泊可能な施設「comore」を整備しているという。みんなが拠点として使える施設として整備し、ゆくゆくは、引きこもりがちな子供たちのための空間としても活用していけることも検討しているという。子育て中のママさんたちが集う場としても活用されており、街中の居場所となっている。



宿泊・滞留施設「comore」

（（左）提供：合同会社のしろ家守舎 （右）撮影：中小企業庁商業課）

また、畠町商店街の入り口付近に位置する旧鴻文堂書店をリノベーションし、高校生のためにフリースペース「PROJECT KÔBUNDÔ」を整備した。この空間は平日 15:00～20:00 まで、高校生であれば無料で利用できる空間になっており、勉強でも遊びでも、読書やおしゃべり等何にでも使える空間として、高校生たちの居場所となっている。



「PROJECT KÔBUNDÔ」内装

（撮影：中小企業庁商業課）

このエリアで子供たちだけでなく、子育て世代も含めた若者の居場所をつくり、街の皆で子供を見守る仕組みづくりを目指している。

小さなチャレンジが少しずつ人を変えてく

そして今、街も変わろうとしている

堀口さんは、「「マルヒコビルディング」の整備や車道や歩道等を活用したイベントの実施をはじめ、能代地域は少しずつまちの活性化に向けて動き始めている。結果を見れば、これらの取組は賑わいを創出しており、他の地域からも注目されていると思う。しかし、最初は歩道に椅子を並べるところや建物所有者を説得するといった、小さくても、まずは始めたことがとても大切だった。」と語る。その姿勢を裏付ける「第2期能代市中心市街地活性化計画」に掲げられた言葉、「小さな波がうねりをおこし大きな波となり、その波及効果がまちの姿の変化につながっていきます」が印象的だ。

「秋田県主催の勉強会「動き出す、商店街プロジェクト」に参加したことからはまり、今まで継続して取り組んできたことによって、現在はまちの活性化に寄与できる場所も増え、それに伴いやりたい事も増えてきたが、人手が足りていない状況にある。そのため、今後は関わるプレイヤーの数を増やすことを目標とし、今までは駅前商店会が主催として執り行ってきたイベントや空き店舗を活用した事業も、近隣の畠町商店街とも連携して実施していきたい。」と湊さんは語る。

湊さん、堀口さんたち5人を中心とした取組から始まった小さなチャレンジが、少しずつ街の人たちを変えてきた。そして、その変化の積み重ねが、少しずつ街自体の変化につながってきている。シャッター街の代表例として教科書や雑誌に載っていた能代が、地域活性化の成功例として紹介されるようになった。今では、能代で行っている地域住民の交流イベントが、秋田県内の複数の地域で広がっていたり、能代の空き店舗リノベーションの取組を先進事例として、同じく空き店舗・シャッター街の課題を抱える岩手県葛巻町の関係者と交流が生まれたりするなど、まちを飛び出して、変化が広がり始めている。

かつてシャッター街の代名詞だった街は、今後どんな街に変わっていくのだろうか。